

---

# たとえ悪魔とののしられようとも。

沙風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たとえ悪魔とののしられようとも。

### 【Nコード】

N8837A

### 【作者名】

沙風

### 【あらすじ】

嫌われ者の闇斬光と人気者の姫野瑞希がある晩の事件をきっかけにふれあい、『クリムゾン紅』という名の悪魔との戦いと日常生活の中で、光が瑞希を通して本当の自分を探していく自分探しの物語。

## 『プロローグ』 (前書き)

読者の皆さん、こんにちは。沙風です。

読みにくい点がいくつかあると思いますが、ご了承ください。

## 『プロローグ。』

悪魔。

この世にはそんな呼ばれ方をする奴がいる。

俺のような闇に生きる者達の事だ。

この世の人間は知らない事実。それは本当の悪魔の存在だ。

俺達は奴等から何も知らない人間達を護る為に存在する。

俺達はどんなに傷付こうとも護らなくてはならない。

たとえ悪魔とのしられようとも。

## EP1 『事件。』（前書き）

こんばんは、沙凪です。

サブタイトルのEPは「エピソード」とお読みください。それでは、たとえ悪魔とのしられようとも。をお楽しみください。

## EP1 『事件。』

見ろよ、アイツ。

ああゝ『闇斬』？アイツ本当に暗くて不気味だよなあ。

あいつの腕にヘンな模様みたいなああるよなあゝ。お前も見た事あるか？

見てねえよ。気持ち悪くて見ていられるかよ。  
つか、アイツのあだ名ってさ・・・

あつ、あの人が来たわよ。

あの人って何考えてるかわからなくて気持ち悪いよねえゝ。

腕の入れ墨、あれ宗教の関係かなにかじゃないの？きつと、やばい事やってるんじゃない？

近寄らない方が身の為だわ。

マジで、あの人のあだ名ピッタリよね・・・

・・・悪魔・・・

俺はそう呼ばれている。闇の世界で生きる者として罵声を浴びるのは仕方のない事なのかもしれない。

「瑞希、お昼どこで食べる？」

「屋上でよくない？」

「じゃあ、屋上行こう!!」

ギイイイ・・・ガチャン!!

「今日は晴れてて気持ちがいいね!!」

「そうだね、瑞希」

「じゃあ、いつもの場所に行こう。」

「ねえ、あの人・・・」

「あつ!! あいつは・・・」

「・・・っ!!」

「ちょっと、そこどいてくれない? 邪魔なんだけど『悪魔』!!!」

「・・・俺がここを動く必要はない。」

「私はそこに座りたいんだけど、アンタが邪魔で座れないんだよね。」

「俺が先に座っていたんだ。お前がここに座る権利はない。」

「そこは、私達の特等席なのっ!!」

「もう、いいよ、瑞希、違うところに行こうよ。」

「・・・」

「・・・そうね、こんな奴の傍にいたらこっちがおかしくなるわ。」

俺の名は、『闇斬 光』やみきり ひかり 銀龍高等学院に今年入学したばかりだ。だ

が、俺は他の奴らとは違う。俺は闇に生きる存在だ。

「おい、HRは終わりだ。日直、号令頼む。」  
起立・・・礼。

「真美、部活行くよっ!!」

「あつ、うん！！待ってよ瑞希」

「待ってるわよ」

「もうすぐ大会だねえ、瑞希ならきつとレギュラーとれるよ！！」

「真美だって、上手じゃない。2人でレギュラーとろうね！！」

「でも、一年生でレギュラーなんてとれるのかな？」

「努力よ、努力！！頑張れば慣れるよ！！」

「そうだね、頑張らなくちゃっ！！」

「おいっ！！姫野！！腰が高いぞ、もつと腰を落とせ！！」

「はいっ！！」

「うわあつ、監督厳しい。瑞希怒られっぱなしだね。」

真美が笑いながら話をかけてきた。瑞希は、それに答えるがとてもじゃないが元気な返事は返せなかった。

「大会が近いからってこんなに練習するなんて・・・。だいたい、なんで私ばかり・・・」

「それだけ期待されてるんだよ、瑞希はっ！！」

「どうだかねえ」

ムスツとする瑞希に真美は優しく、そして明るく答えた。しかし、瑞希は疲労のせいか薄い反応をした。

「こらあっ！！喋ってるヒマがあつたらさっさと走れ！！」

「はっはい！！」

私は、『姫野<sup>ひめの</sup> 瑞希<sup>みずき</sup>』銀龍高等学院に今年入学した一年生。バスケットボール部に入部し、毎日を汗と努力と友情の青春で生きている。大切な人は親友の『麻野<sup>あさの</sup> 真美<sup>まみ</sup>』で、嫌いな奴は『闇斬 光』だ。

「今日も疲れたねえ。あつそうだ真美！！夕飯どこかで食べていこうよってか、ラーメン食へに行こうよ！！割引券の期限今日までなんだ。」



「またラーメンですかあゝ。さり気なく5日連続ですよ？昨日も同じような内容でラーメン屋に行った記憶が……。私はラーメンを見るたびにこの5日間を思い出すよ。」

「まあゝいいじゃない、美味しいんだし」

この瑞希のラーメン好きにも困ったものだわなどと思いつつもラーメン屋に足を運ぶ真美であった。

「ふあゝゝ、美味しかったあゝ！！やっぱ、オジちゃんの作る醤油ラーメンは最高だよっ！！」

「私は塩が1番だと思うなゝ。」

「醤油なのよっ！！ねっ、オジちゃん！？」

「ん？いや、オジちゃんは美味しいって言われればどの味でも構わないよゝあははは。」

「醤油が一番って言いなさいよゝ！！」

「あははは、ゴメンよ瑞希ちゃん。お詫びに醤油ラーメンの割引券あげちゃうよ。あははは。」

「あゝ、オジちゃんダメよこの子に割引券なんか与えちゃ。私が毎日付き合わせれるんだからあ。」

「いいからいいから じゃあ、オジちゃんまた明日来るねっ！！」

「はいよゝ、いつでもいらっしやい。」

「明日も来る気満々だね、瑞希。少しは私の事も考えてよね。」

「考えてるよっ！！考えてるけど、己の欲望には敵わないのっ！！」  
「考えてないじゃない……。」「

お気楽な瑞希は真美の意見をまったく聞かずに明日もラーメンを食べようだ。その後もいつもの様な会話をしているうちに自宅の近所まで来ていた。

「そうそう、真美。お願いがあるんですけどあ……。」「

「宿題でしょ？たまには自分でやりなさいよねえ。」

「さっすが真美　じゃあノート渡すから、明日の朝起こしに来る時に渡してくれ・・・。」

瑞希と真美の家は隣の隣であつた為、昔から真美が瑞希を朝起こしに行き、朝食と一緒に食べるとというのが暗黙の了解であつた。それは、瑞希の母が朝には仕事に出掛けてしまふ為朝に弱い瑞希を起こす者がいないからである。瑞希の父は数年前に不慮の事故で亡くなつてしまつてゐる為今現在姫野家を支えているのは、瑞希の母である。その関係で母は家を空けている事がほとんどであつた。

「どうしたの？」

「あつりやあー、ノート忘れてきちゃつたあーテヘッ。」

「テヘッ、なんて言つてもダメだよ！！私は先に帰るからねっ！！瑞希の家の掃除もしなきゃいけないんだから。瑞希つてば掃除なんかしないでしょ？」

「真美のけちいゝ。いいよー一人で取りに行つて来るから。」

「遅いから気をつけてね！！」

「取つて来たら家に届けるよ！！」

「はあゝい。」

部活で疲れ果てた体を気合いと言う名のエネルギーで走らせ二十分瑞希の目の前に学校が見えてきた。

「はあはあはあ、んつはあはあ・・・。ああゝゝ、部活の後にこの距離を全力で走るもんじゃないわ、走り死ぬわ・・・。」

警備員さんが閉めたのか、校門は鍵が掛けられていた。が、瑞希はそんな事はお構い無しに校門をよじ登り、教室へと入り込んでいた。

「あつたあーー　私のノート発見！！早く帰つて真美に宿題やつて

もらおうと」

ノートを手に取り、教室を後にしようとしたその時。  
ドオオオオン……。同じ階の理科室の方から爆発音が聞こえてきた。

「ななななな、なによお！！なんなのよ……。理科の先生、実験にしちゃやりすぎじゃないのぉ？学校破壊する気？公共の物壊したらいけないって知ってるのぉ……。」

瑞希は、冗談を言い聞かせおびえる自分を励ました。すぐ帰ればいいものの、興味本位で理科室へと向かって行く。  
覗き込むように理科室を見ると窓側の壁や窓ガラスに大穴が開いていた。まるで何者かがここで争ったかのようにだった。

「何よ、コレ。喧嘩かなんか？それにしちゃ物が壊れすぎじゃ……。」

啞然とする瑞希の背後に何やら怪しげな影が近づく……

「……。っ！！だっだれ！？」

「姫野、こんな時間に何やってるんだ……。はやく帰れ……。よ……。」

「なっなんだ、理科の先生の平尾先生じゃないですかぁ。びっくりした〜。」

「はや……。く……。かえれ……。よ……。退学……。にされ……。たいのか……。」

「先生？大丈夫ですか？具合悪そうですよ〜病院に電話してきま……。」

瑞希が携帯を取り出そうとした瞬間、目の前にいる平尾が突如異様な姿へと変貌していく……。とても醜く、おぞましい姿へと。

「きゃああああああ!!」

「血が欲しい!!チガホシイ!!!!ぐうああああ!!」

恐怖のあまり座り込んでしまった瑞希に魔の手が襲い掛かる。

## EP 2 『紅』

瑞希は叫びながら目を瞑った。逃げる余裕は無かった為、頭を手で押さえ無事を祈った。

「おい、伏せろー!」

瑞希はその言葉を聞き、とつさにしゃがみ込んだ。するとその上を先ほどの声の持ち主が飛び越え、怪物に一発の蹴りをかました。怯んだ怪物にもう一度蹴りを入れた。その声の持ち主はしゃがみ込んでいる瑞希を抱きかかえ場所を教室へ変えた。

「だっだれ？」

「ちっ。なんで人がいるんだよ。いるならちゃんと連絡しろよ、あのやろう。」

辺りは真っ暗で人の顔など見えたものではないが、その人物の顔を見続けていると、月の光が一瞬差し込み顔が見えた。そこにいたのは。

「闇斬 光・・・？」

「・・・ちっ。顔まで見られちゃったか。ああゝ関係ない人間巻き込んでしまったな・・・。」

「なんで、アンタがここにいるのよ！！てか、あれは何な訳？」

「・・・あれは本物の悪魔。」

「は？何よそれ？悪魔なんている訳無いじゃない。」

「・・・お前も見ただろ。あれは悪魔だ。正確に言えば、たちの悪い動物か。」

「あれが動物？そんなもんじゃないわよ!!」

この事態についていけない瑞希は完全に冷静さを失っていた。

「だいたい、なんであんたがここにいるのよ!!」

「・・・俺は、あいつ等みたいな悪魔を退治する為にここに来ただけだ。俺も悪魔だなんて言えたたちじゃあないがな。」

「えっ？何、あのあだ名の事？」

「・・・奴らは紅クリムゾンつと言う生物だ。今の世の中の人間には知られていない、闇の生物だがな。奴らは姿形は人間と変わらないが、覚醒すると悪魔のような姿になり、人を襲うようになる。」

「そっそんな事って・・・。」

「・・・奴らは、国の判断で世間には知られないようにしている。今の世の中に知れ渡つたら大混乱を招く。なぜなら、この世の人口の内、日本だけでもおよそ500人に1人の割合で紅がいると言われている。まあほとんどの奴が未覚醒だがな・・・。」

「えっ？あの化け物がそんなにいるって言うの？」

「・・・そう言われている。詳しい数は俺は知らないが・・・。俺達は何も知らない人間どもを護る為に存在しているんだ。国の上層部の人間だけがこの組織の存在知っていて、この組織を援助している。」

「・・・組織ってことは、他にもアンタみたいな人がいるってこと？」

「ああ、そう言う事だ。組織名は『紅狩人』クリムゾンハンターズ 通称『狩人』ハンターズ と呼ばれている。日本にいる狩人は20人程だ。」

「・・・そ、それはわかつたんだけど・・・。あの、さ、なんでアンタ自分は『悪魔だなんて言えたたちじゃない』って言ったの？」  
そう瑞希が尋ねると、光は教室の窓の方へと3・4歩程歩き、目を眺めながらまた話を始めた。

「・・・覚醒した紅どもは、昼間は未覚醒の状態と変わらないのだが、夜になると人間の血を求め人を襲う。覚醒した紅だと判断する方法が一つだけある。それは、夕方から明け方までの間に奴らの目を見る事だ。奴らの目は月の光を浴びると目の色が『紅色』になる。それゆえ、奴らの名は『紅』と言う。」

そう言い終えると、光は瑞希の方に顔を振り向けた。すると・・・ガタッ・・・！！光の顔を見た瑞希はある事に気が付き、数歩後ろに下がった。

「・・・あ、アンタの片目・・・紅色・・・。」

光の右目は、瑞希の言うとおり紅色だったのだ。

「・・・だから言っただろ？俺は悪魔なんて言えたたちじゃないって。俺は紅と人間の間に生まれた『半紅』<sup>ハーフクリムゾン</sup>なんだよ。」

「まさか、悪魔が本当の悪魔だったなんてね・・・。」

「なんとでも言う方がいい。それは変える事の出来ない事実だ。狩人の者は数人を除いて俺のような半紅だ。」

「じゃあ何？アンタも人の血を吸うわけ？」

「いや、半紅は吸血はしない。ただ、年に2回ほど輸血をする。輸血をしなければ体が弱体化し、生命維持が出来なくなる。」

「淡々と話をする光に、新たな質問をしようとしたその時。教室のドアが壊れ、ドアの向こう側に紅の姿が見えた。」

「・・・おっと、ゆっくりしている時間は無いようだ。詳しい事はあとで説明する。外までお前をつれいく。そのあとは自分でどうにかしろ。」

「ちよつと・・・。」

光は瑞希を抱きかかえ、教室の窓から校庭へ飛び降りた。

「きゃああああ!!」

「騒ぐな。この程度では、俺は死なない。無論お前も死なせはしない。」

光の着地とほぼ同時にどおおおん・・・と地面に低い重低音が響く。

「逃げ、また奴に追いつかれるぞ。早く逃げろ!!」

「えっ!? あ、うん。わかった。」

瑞希が走り出すと光は走り出した瑞希を呼び止めた。

「・・・おい。」

「何よ!!」

「このことは誰にも言うな。絶対だ。」

「わかってるわよ!! だいたいこんな話誰も信じないって!!」

「・・・それもそうだな。さて、さっきの続きといくか。」

「ぐわぁおんおお!!」

「・・・いくぞ。」

掛け声と同時に光の腕にある入れ墨のようなものがひかりだし、日本刀へと変化した。



### EP3 『本部。』

「はあはあはあはあ……。もうっなんなのよ！！なんでこんな事になるのよ！！」

瑞希は真美の待つ家へ走り続けた。この事態を受け入れまいと現実から逃げるかのように。

「……。あいつ、大丈夫なのかな……。」

「まだ、こんなところにいたのか……。」

「うわああああ！！！！」

「何故驚いている？」

「いきなり話しかけられたら、誰だって驚くわよ！！」

「……。そうか、すまない。」

「……。あんた、さっきのバケモノはどうしたの？」

「問題ない。葬った。」

「はあ……。よかった。」

「俺は、これから狩人の本部へ戻る。お前はいつもどおり生活するんだ。そして今日のことは口外するな。」

「わかってるわよ。」

「……。じゃあな。」

そう言っていると光はどこかへ走り去って行った。

「ただいま。」

奥からエプロン姿の真美が出てきた。どうやら食欲旺盛の瑞希の為にまた夕飯の支度をしていたようだ。

「おかえり！！遅かったね。」

「えっ、ああ？その、ノートがなかなか見つからなくて……。」

「ふう〜ん。まあ、いつか。それより、瑞希お腹空いてるんじゃない？どうせ何か食べ物ない？とか、あとで言うと思って夕飯今作ってるの。もうすぐできるから、お風呂でも入っちゃえば？」

「うん、そうする。」

「はぁ～・・・。なんか、どつと疲れた。『紅』か、あんなバケモノが存在していたなんて。あぁ～、もうわけわかんないよぉ。」

「瑞希」。もうご飯できたよ。早く出て一緒に食べよう!!」

「はぁ～い、今行く。まあ今の私が考えたって仕方ないか。よしっ!! 明日あいつに問い詰めてやる!!」

「日直、号令を。」

日直が号令をかけ、いつもと変わらぬ授業が始まった。

・・・いつもと同じはずなのに同じじゃない。そんな気がする。周りが変わったのではない、私が変わったんだ・・・。

瑞希は心の中でそう思った。授業が終わり、瑞希は光のところへ駆け寄った。

「ちよつと来て!!」

「・・・ん？」

「いいから来い!!」

光の返事を聞かないうちに、瑞希は光の手を取り屋上まで引っぱり出した。

「何のようだ？」

「昨日の事、もつと詳しく説明しなさいよ!!」

「ああ、そのことか。それなら、放課後、またここに来い・・・。」

「ちよつと・・・どこ行くのよ!!」

光は屋上から飛び降りどこかへ行ってしまった。

「に、逃げられた・・・。」

部活も終わり、屋上へと出た瑞希。あたりは薄暗くなり、町の明かりが美しかった。

「・・・いない。」

姿がない。そこにはいなくてはならない光の姿がない。

「何でいないのよ・・・。」

そう吐き捨てる、瑞希はその場に座り込んだ。

「・・・遅い。」

30分ほどたつたころ、ようやく光が屋上へ来た。

「すまない。本部に行つて、報告やら申請やらいろいろしていたんでな。」

瑞希はふてくされた顔で光をじつとみつめた。

「・・・。。。。。。今からお前を狩人の本部へ連れて行く。あわせたい人物がいる。」

「えっ？本部に？」

瑞希の表情が一転した。少し瑞希はウキウキしていた。なぜなら未知の組織の本部へ行けるのだから。

#### EP 4 『理由。』

「ねえ、どこまでいくの？」

「黙ってついて来い。もうすぐ着く。」

「わかったわよ。あつ、真美に遅くなるってメールしなきゃっ！」

「あつ、そうだ。姫野。本部に入る前に必ず携帯の電源は切った方がいい。いや、切れ。」

「えっ？ マナーモードじゃダメなの？」

「アイツは、自分携帯以外が話しの途中で鳴るのが嫌いなんだ。」

「ただの自己中じゃん！！」

なんか、こうして話していると意外とこいつも普通なんだなあ・・・

そんな事を考えているうちに人気のない廃工場に着いた。

「ここだ。」

「ここが本部？ なんか、いかにもって感じ。あつ、電源切るんだよね？」

「ああ、アイツがキレても俺は助けないぞ。痛い思いをするはずだ。俺は痛いのが嫌いなんだ。」

コツコツコツ・・・自分の足音が鳴り響く。奥へ行くに連れて響く足音は大きくなる気がする。それほど中は静かであった。

「この部屋だ。」

そう言つて、光は扉を開いた。すると、今までの風景とは打って変わってキレイな会議室のような部屋に出た。

「やあ。『姫野 瑞希』さん。」

「あなたは？」

「あいつは、狩人日本支部の長だ。皆、支部長と呼んでいる。本名は『火渡 神』だ。」

「はじめまして。姫野さん、火渡です。」

「はじめまして。」

火渡は、以外にも普通で穏やかそうな顔つきだった。髪は耳にかか  
るくらいあり、顔はきりつとしていて真面目そうだ。メガネをかけ  
ているせいかな、少々弱々しい印象を受ける。

「こいつが、このあいだ話した奴だ。大体話はした、この世界の真  
の姿の・・・。」

「そう。で、君はどうするつもりなんだい？」

「こいつにも、狩人の任務をやらせてみる。真実を知った以上、こ  
いつにも戦う必要も出てくるはずだ。」

「そうだね、知ってしまった以上彼女にも狩人へ入隊してもらいま  
しょう。」

「ちよっと!!そんなの困るわよ!!」

瑞希は、当然の如く拒絶した。

「いや、お前に断る権利はない。入らざるを得ないんだ。たとえ、  
どんな理由があってもだ。」

## EP5 『権利』

「断る権利が無いってどういう意味よ!!」

「簡単に言つとだな・・・。」

「私から説明しよう。」

光の説明に割り込むように神が口を開いた。

「簡潔にすると、奴らに遭遇または接触した者は、己の意志にかかわらず身体の一部の性質が変化する。その変化は奴らにとって脅威であり、奴らにも戦う必要がでてくる。つまり、奴らの攻撃から自分を守らなければなくなる。それには、我々と行動を共にし、戦う術を見につけなくてはならないからだ。それに、奴らの食事は人の生き血だ。つまり、奴らに大切な人を襲われる可能性も無い。それらから守る為には、君は狩人、（ハンター）入るしかないというわけだ。」

「そんなことって・・・。」

瑞希が途方にくれていると、誰かが走って来るような足音が響いてきた。

「し、支部長つつつ!!!」

『ドカンッ!!!』勢い良くドアが開くとそこには、男がひとり荒い息をたてていた。

「大変だっ!!!支部ちょ・・・。」

『ドーン・・・ボンッ!!!』

低い重低音が鳴り響くと、男の周りが爆発した。

「あわわあわわあわわ・・・。あつぶないな、支部長!!!死んじゃうところだったじゃないかっ!!!」

「当たり前だよ。狙ったんだから。」

神は、先程とは打って変わって、冷酷かつ残忍な雰囲気漂わせていた。

「ど、どうなってるの・・・?」

「今アイツはキレはじめている。あの男がノックもせずには部屋に入  
ったからだ。携帯が鳴った時もあなる。」

「それだけで・・・？」

「神はそういう奴だ。」

なんか、面倒なことに巻き込まれちゃったなあ・・・

「それより、朔魔。何があつたんだ？」

光が部屋に入ってきた男に尋ねると彼はあわてた表情でこういった。  
この男は『朔魔<sup>さくま</sup>』と言うらしい。

「あいつが帰ってきたんだ！！」

朔魔は血相を変えていった。

「あいつつて？」

瑞希が光に尋ねると光はあきれた顔で応えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8837a/>

---

たとえ悪魔とののしられようとも。

2010年12月14日04時10分発行